

行癌であり、早期癌の平均年齢は51歳で、5人が40歳台であった。便潜血陽性者は11例中4例のみであった。局在は、直腸3例、S状結腸4例、横行結腸2例、上行結腸1例、盲腸1例で、4例(37%)は右側結腸であった。

40歳以上の成人は、便潜血検査の結果にかかわらず、一度はTCFを受けることが望ましいと考えられる。

25) 盲腸癌術後孤立性脾転移の1例

松本 春信・山井 健介
 小山俊太郎・多田 哲也
 有本 直樹 (立川総合病院外科)

結腸癌の脾臓転移は稀であり、症例の報告も少ない。今回、盲腸癌術後の脾臓単孤立性転移症例を経験したので報告する。症例は74歳男性で、平成6年11月に盲腸癌にて右半結腸切除術を施行した。高分化腺癌でse, n₂(+), Po, Ho, M(-)であった。術後経過は良好だったが、平成8年6月CEA値が13.5と上昇し、US, CT, MRI, 血管造影にて転移性脾腫瘍と診断された。9月20日手術を施行したが、脾尾部にわずかに直接浸潤が認められたため、脾尾部切除を合併した脾摘除術を行った。肝、腹膜、リンパ節には転移はなく、脾臓単独への孤立性転移であった。転移巣は6.5×5.0×4.3cmで黄白色、充実性であった。病理組織学的には高分化腺癌で、既往の盲腸癌の転移と考えられた。文献的考察を加え、症例報告する。

26) 当院における大腸癌手術症例の検討

太田 一寿 (太田総合病院
 附属太田記念
 病院外科)

1987年より約10年間で820症例の大腸癌の手術を行った。この820症例830病変について検討を行った。

〈結果〉

①ここ2年間は100例以上の手術を行っており、年々増加している。

②男性にやや多く、60代、70代、50代が多かった。

③約80%の症例に根治手術が行われた。

④肉眼型では2型が、組織型では高分化腺癌が、深達度ではal・ssが多かった。

⑤潰瘍性大腸炎の癌化例が1例、ポリポースの癌化例が6例みられた。

⑥穿孔例の約80%は左側結腸で、約60%が人工肛門を

造設した。

⑦追加切除症例の約30%に癌が認められた。

⑧若年者高齢者では、予後の悪い症例が多かった。

27) Fournier's gangrene の3例

津田 祐子・阿部 要一 (新潟医療生活協同)
 山田 明・新保 雅宏 (組合木戸病院外科)

われわれは1994年4月より1996年9月までに、Fournier's gangrene と考えられる陰部周辺の急性感染性壊疽の3例を経験した。いずれも肛門周囲に膿瘍を認め、1例は大腿部から腹壁に、1例は大腿部背側に、1例は陰嚢内に急速な拡大をみせた。CT施行の2例では、病変部の皮下から筋層にガス像を認めた。膿瘍部切開排膿、ドレナージ、抗菌剤投与を行い、2例は軽快したが、入院時既にショック状態に陥っていた1例は、DICから多臓器不全により死亡した。Fournier's gangrene は急激な増悪をきたしやすいため、陰部周囲膿瘍の症例では本症を念頭においた早期診断早期治療が重要であると思われた。

28) mesh による鼠径・大腿ヘルニア修復術の比較

川上 一岳・大谷 哲也 (日本歯科大学)
 早見 守仁・吉田 奎介 (新潟歯学部外科)
 川合 千尋 (消化器科・外科)
 川合クリニック)

当科で1992年5月～1996年10月までに施行した腹腔鏡下ヘルニア修復術(以下LH)群49例と従来のアプローチによるメッシュプラグを用いた修復術(以下MH)群8例とについて比較検討した。

LH群は男41例、女8例で、年齢は35～82(平均63.1)歳、MH群は8例全例が男で、年齢は61～85(平均74.8)歳であった。LH群は全例が全麻下に行われ、手術時間は平均1時間28分(両側例を除く)、MH群は腰麻下4例、局麻下4例で手術時間は平均46分であった。両群ともに術直後を除いて全く鎮痛を要せず、術後入院期間はLH群3.9日、MH群4.9日であった。その他、術後合併症の有無や麻酔時間、抗生剤の使用などについても検討した。